環境シリーズ
はじめなきゃ！
Part 55

川から見直す自然環境

市民活動による河川清掃活動

家棟川に流れ込んだごみ

春。 日に日に暖かくなり、出かけるには良い季節となってきました。休日には近くの川原でお花見を計画されている方もいるかもしれません。市内には、地域ぐるみで川をきれいにする活動を行い、川を憩いの場所として整備されているところもあります。そうした川では、この時期メダカやドジョウなど多くの生き物たちの姿を見ることができます。

けれど、市内を流れる全ての川でそういった活動が行われているわけではありません。市内の多くの河川が合流する家棟川では、誰かが捨てていったペットボトルや空き缶、ビニール袋が大量に流れています。これらはやがてびわ湖に流れ着きます。

そのびわ湖の水質は、今どうなっているのでしょうか。水質の富栄養化の指標となる窒素やリンの量は、過去10年間の平均に比べ少し数値が改善したものの、北湖ではリンが、南湖では窒素とリンが環境基準（※）を達成していません。また有機物による汚濁状況を測るCOD（化学的酸素要求量）では、びわ湖全域で環境基準の値を超過しています。

このような現状の一方で、身近な川からきれいにしようという取り組みが次第に広がってきています。堤防の草刈りや、地道にごみ拾いをして川をきれいにする取り組みを始め、川の形状や水環境の変化のために姿を消してしまったホタルやサワガニなどを復活させようとする活動、また子どもたちと一緒になって楽しめる川づくりを行っている地域もあります。

このような自治会や市民団体の川をきれいにしようという努力により、姿を消していたホタルや魚をはじめとした生物が再び見られるようになるなど、少しずつ目に見える変化が現れてきています。

また昨年7月には、市内の河川で環境保全活動を行っている市民団体や自治会の方が集まり「里川・内湖フォーラム」を開催されました。今までは、その地域ごとにそれぞれで活動していた団体が、まるでびわ湖に流れ込む川のように繋がったのです。

市では、このような活動の普及を図ることで、今後地域の川の環境を守る取り組みが市内全域に広がることをめざしています。あなたの地域の川は、どうでしょうか。お出かけの際には、少し注意深く覗いてみてくださいね。

※環境基準…環境基本法に基づき定められた人の健康の保護および生活環境の保全のうえで維持されることが望ましい基準

家棟川エコ遊覧船による自然体験

昔ながらの手漕ぎ舟に乗って家棟川の自然環境と川の現状を体験してみませんか。

実施日…4月4日㈯～随時　※強風、雨天の場合は中止

集合場所…家棟川河口ビオトープ駐車場

申し込み・問い合わせ…NPO法人家棟川流域観光船☎589－2267

問い合わせ…環境課☎589－6431、錐589－5069

歴史の小窓
ー学芸員のメッセージー

55

歴史民俗博物館
☎587-4410、Fax587-4413

休館日／月曜日、4月30日㈭、5月7日㈭
※5月4日㈷は開館します

◆小テーマ展・野洲の古文書（7）「小篠原村の歴史とくらしー苗村家文書の世界ー」／4月19日㈰まで
博物館に寄贈を受けた苗村家文書から、小篠原村の古文書や絵図を展示。

◆近江八景図屏風［1799（寛政11）年・吉村孝敬筆］特別公開／4月19日㈰まで

◆春期企画展　古代地方木簡の世紀「西河原木簡が語るもの―古代近江野洲の様相―」／4月25日㈯～5月31日㈰
野洲市の西河原遺跡群で出土した木簡をはじめとする文字資料や関係資料を展示。

西河原木簡が語るもの

西河原森ノ内二号木簡

・自舟人率而可行也　其稲在処者衣知評平留五十戸旦波博士家

・椋□伝之我持往稲者馬不得故我者反来之故是汝トア

木簡（もっかん）とは墨書（ぼくしょ）で文字が記された薄い板のことをいい、日本ではおよそ35万点近くが出土しています。割合としては古代の木簡が中心で、出土地は都が置かれていた都城跡から多く見つかっています。

野洲市では、西河原とその周辺の遺跡を中心として現在までに計96点の古代木簡が出土しています。遺跡ごとの内訳をみてみますと、西河原森ノ内遺跡が18点、西河原宮ノ内遺跡が64点（削り屑57点を含む）、西河原遺跡が6点、湯ノ部遺跡が1点、光相寺遺跡が5点、虫生遺跡が1点、野々宮遺跡が1点になります。時期的には7世紀後半から8世紀前半にかけてのものが大半で、特に7世紀の木簡が一定数出土していることには注目する必要があります。なぜならその時期、木簡がまとまって出土している遺跡は都城跡出土木簡を除けば全国的にみても数少ないからです。

木簡は、一般的に文書、記録、付札、習書などに分類されます。野洲市出土の木簡では判別のつくものは26点で、文書木簡が5点、記録木簡が15点、付荷木簡が3点、習書木簡が2点、歌木簡が1点です。

写真は「西河原森ノ内二号木簡」と呼ばれている文書木簡で、法量は410㎜×35㎜×2㎜を測ります。その両面に「衣知評平留五十戸にある旦波博士の家から稲を持ち帰ろうとしたが、馬を調達できなかったため、舟人を率いて取りに行くように」という内容の文が書かれています。「馬」の代わりに「舟」をという内容から、衣知評（えちのこおり：現在の彦根市南西部あたり）の平留五十戸と稲の運搬先と推定される西河原遺跡群が水陸の結節点であったことを示しています。古地形の復元からも、琵琶湖岸は今よりも西河原遺跡群周辺まで迫っていたことが知られていて、湖上交通の拠点であったことも想定されます。

このように、木簡に記されている文字はその内容だけではなく、その背景にある当時の社会や環境などさまざまな情報を内在している大変意義深いものなのです。

（歴史民俗博物館学芸員　角建一）